

最後に以上の主旨とは違うが、別の耳よりのニュースもお知らせしたい。それは M. エックハルトがトマスの *Sententia* につけた注釈本が確実に残されているとのこと。その写本はまだ発見されていないが、こうしたニュースも写本研究者の心をときめかせるのである。

マイスター・エックハルト国際学会報告

長 町 裕 司

1303年の聖霊降臨祭に開催されたドミニコ会総会の決定により、従来まで一つであったドイツ（テウトニア）全管区は北のサクソニアと南テウトニア管区に分割され、そのサクソニア（ザクセン）管区の初代管区長（Prior und Privinzial）の任命を受けたエックハルトは、パリ大学神学教授（1302年～）の活動から Erfurt にあるドミニコ会修道院に帰還する。今回の国際集会は、彼が1311年ドミニコ会総長から派遣を受けて再びパリ大学神学教授活動（～1313）に赴くまでのこの（第二次）Erfurt 時代を焦点とし、その全貌を ①霊性—教会—修道会史的観点 ②（エアフルト時代に属するものから収集された）説教集“Paradisus anime intelligentis”を中心とするその他一連の〈神の誕生説教 Gottesgeburtszyklus〉等のドイツ語説教における思想動向と表現形式 ③組織的三部作“Opus tripartitum”序文の構想とその思考スタイル ④ドミニコ会の霊性資料としての意義も有する“Die Rede der Unterscheidung（教導講話）”を巡って等、今日第一級のエックハルト研究者の諸成果を結集して学問的に再構成することを企図したものであった。参加者はドイツ—オーストリアから多数の他、イタリア、フランス、オランダ、アメリカ合衆国、南アメリカから数名、そして日本からの（私を含め）3名であった。Erfurt 大聖堂の最上階にある素晴らしい見晴らしと伝統の重みを持つカトリック神学部の Coelicum にて3日間にわたって極めて集中した研究発表と啓発的で豊かなディスカッションが行われ、休息時にも様々な形で交流をいただいたことも含め、我々の時代に生きるカトリック信仰と思索

の在り方を熟考する上でも極めて意義深い集会であったと言える。(更にこの国際学会に先立って、23日～24日の2日間「エックハルト国際ワークショップ」が同地にて挙行されていた。) 3日間とも午前中(9:30～13:00)と午後(15:00～18:00)にそれぞれ3つ乃至は2つの研究発表(計16)とディスカッションが催された上、更に夕食後にはエックハルト研究の大家による講演が3日間とも盛り込まれる程内容の充実したErfurtでの初秋の日々であった。以下、各セクションでとりわけ私の関心を喚起させた研究発表について短くコメントしたい。

この国際学会全体を司会し運営世話人(Geschäftsleiter)でもあったAndreas Speer氏(Würzburg, 以前KölnのThomas-Institut)は、初日の冒頭で„Zwischen Erfurt und Paris. Eckharts Projekt im Kontext“と題する導入的意義も兼ねた研究発表を行ったが、Erfurt時代を固有に主題枠とすることの今日のエックハルト研究の状況について極めて適切な見通しを与えるものだった。ラテン語著作とドイツ語著作の関係等も含め、思弁的洞察と倫理的・靈的要求の統一を巡る諸テーマの解明にとってのErfurt時代の重要性が強調された。上記②のセクションでは、イタリアのLecceで教えているDagmar Gottschall女史が„Zum Umgang Meister Eckharts mit Wörtern in seinen deutschen Predigte“と題してドイツ語説教Nr.18を手引きに『創世記註解』へと説き及び、「聖書のことばは、第一の始原的ことばの力を保有している限り、能動知性の創造力に基づき靈的に解釈され得る」というエックハルトの言語理論についてとても興味深い議論を呈示した。更に、(筆者も個人的に知己を得ている)若手の精鋭Markus Enders氏(Freiburg i. Br.)が„Gott ist die Ruhe und der Friede“という表題の下にErfurt時代に属するドイツ語説教Nr.7(Populi eius qui in te est, misereberis)と思想的に後の時期と推定されるNr.60(In omnibus requiem quaesvit)におけるエックハルトの靈的解釈を丹念に現前化した。修道的指針を有するエックハルトの平和理解とすべての運動過程が還帰する平安としての神の本質の連関に光が当てられ、極めて印象深い発表であった。その他、アメリカのパークレー校で教えているNiklaus Largier氏は、エックハルトのドイツ語説教集における偽ディオニュシオス・アレオパギタからの影響関係という重要な主題を問題化した(ディスカッションでは)ラテン語著作から証示することなしにエックハルトの偽ディオニュシオスについての体系的理解を探知できるのかという質疑もなされた。

③の組織神学的問題領野では、先ず Jan A. Aertsen 氏 (Thomas-Institut, Köln) が „Der Systematiker Eckhart“ という最初から議論の余地のある論題で、「エックハルトの思考にはスコラ学への意識的な批判的距離を通しての〈新たな知の建築術〉(eine neue Architektonik des Wissens) が息づいており、三部作 (Opus tripartitum) の序に見出せる構想は知の精神論 (Noologie) を貫徹するものとして彼の全著作の解釈にとって体系的意義を有する」という見解を基礎づけることを試みた。その際、氏は三部作序を構成している諸命題が二部からなる形而上学——つまり、(トマス・アクィナスや Heinrich von Gent を通して発展した) 超越論的名称の形而上学 Transzendentalienmetaphysik 及び上位—下位秩序の形而上学 Metaphysik der Über- und Unterordnung ——に基づいて三つの著作の序列を形成していることを示した上で、この体系構想に含まれる一般的な術語 (termini generales) の解釈を提起する。毎度のごとく、明確な解釈テーゼを立てて分析・論証を呈示する氏の手腕は熟練を経たものであった。続いて、古代・中世哲学の専門領域のみならず今日の宗教哲学や言語哲学に関しても貢献している Theo Kobusch 氏 (Bochum) は、„Lesemeistermetaphysik-Lebemeistermetaphysik. Zur Einheit der Philosophie Meister Eckharts“ と題して (当初予告されていた表題 „Gotteserkenntnis auf dem Wege der Transzendentalienmetaphysik“ を大幅に変更することになったが) エックハルトに具現化された観想的思索と霊的实践の固有な統一の在り方が成立する精神的背景に総合的洞察を展開した。Kobusch 氏は、エックハルトの形而上学的構想にはアリストテレス的な形而上学の枠組みに則ったトマス・アクィナスの組織法に比してより実質的に後期古代の教父からの伝統 (アウグスティヌスのみならず、ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナを介して特にオリゲネスとユスティノス) が優勢であること (例えば、パイディアのモチーフ) を指摘する。この解明を踏まえた上で、神の本質表示である超越論的諸規定を開示する思弁的形而上学は同時にそのまま「魂における神の誕生」としての (魂の解放へ向かう) 精神的—霊的修練に他ならないというエックハルトの思惟の境位が力強く打ち出された。この「実践的—活動的観想」の修養が形而上学 (思弁的哲学) と神秘主義の不可分の統一を生きられた形態とするのであり、その意味でエックハルトの諸著作は〈キリスト教哲学 philosophia christiana〉の伝統を正統に継承するものであるとする氏の言論には私も高揚を感じるのを禁じえなかった。このセクションの最後には、オランダからの Wouter Goris 氏 (Amster-

dam/Köln) が „Die Freiheit des Denkens. Meister Eckhart und die Pariser Debatte“ といったテーマ設定の下、アリストテレスの選択の自由に端を発しラテン中世を通しての「知性と意志」を巡る 14 世紀精神論的議論の枠組みとの連関でエックハルトの独自の立場を浮き彫りにした。その際、Gottfried von Fontaines と Johannes Duns Scotus の立論を明示した上で、とりわけスコトゥスの「意志の自己規定 (Selbstbestimmung) としての自由 (：意志のみが自由であって、理性は自然本性の領域に属する)」に真っ向から対立するエックハルトの独自性 (即ち、「制限されない概念である神のみを唯一の対象とする知性 intellectus のみが自由である」という主張) は、13 世紀までのアリストテレス的伝統の基本的テーゼである「意志的自由の知性への依存」を転倒せしめるものかどうか厳密な解釈が敷衍された。

④のドミニコ会の霊性、とりわけ教導講話 „Die Rede der Unterscheidung“ を巡っては、以下の二つが特に印象的だった。最近エックハルトの人間論についての新たな著書 („Gottes Sein ist mein Leben. Philosophische Brocken bei Meister Eckhart“, Theologische Bibliothek Töpelmann Bd. 121, Berlin/New York 2003) も出版した Udo Kern 氏 (Rostock) の研究発表 „Der Mensch sollte werden ein Gott suchender«. Zum Verständnis des Menschen in Eckharts »rede der unterscheidung« は、全く実践的な修道的霊性—倫理へと方向づけられたこの教導講話が後の諸著作において十全に展開される哲学的—神学的人間論の思弁的思想の基礎を含蓄していることを明快に呈示した。その際氏の強調点は、「神への内的回帰 (立ち帰り)」が拘束を受けない自由な心情 (ein lediges Gemüt) を通しての単一な知性の脱自的本性における「神の所有」に他ならず、この目的論志向体制から従順を最高の徳とするエックハルトの諸々の人間論的テーマが理解されるところであった。次に特筆すべきは、修道的伝統を身をもって背負う Walter Senner OP (Paris/Grottaferrata) 神父はずっとドミニコ会特有の僧衣を纏ったままで „Die »rede der unterscheidung« als Dokument dominikanischer Spiritualität“ と題して、問題の教導講話が「砂漠の師父たち」以来のキリスト教の修道的 (monastisch) 伝統で種別的な霊性が伝達される collatio (：聖人や死者の記念と並んで、修道会の共同生活の実践上の問題解明のための集会) に生活の座を有していることを開眼させる話をされた。ドミニコ会においても霊的教導の重要な形式となった collatio は、(勉学に属するところの) スコラにおける lectio (：授業の形式をとった講義) とも修道会の霊

性を綱要的に説く *instructio* とも異なり、主として同じ修道会の教師たちや若い兄弟たちに霊的なオリエンテーションと養成を与える或る一定の具体的テーマを取り扱う独立した講話だったと言える。エックハルトは当該の講話を「神に対する従順に他のすべての徳が含まれている」という神学的人間論上の根本主張をもって始めており、人間の我意が如何なる動きも持ち得ない場としての空隙は神によってのみ満たされる神の意志の場であるという霊的志向を貫徹する。„*ex plenitudine contemplationis contemplata aliis tradere*“ (Thomas de Aquino, S. Th. III a, q. 40, a. 2, ad 3) という修道理想は、神への従順を通して神の霊に満たされる説教の実践においてこそ達成されるものであり、エックハルトがドミニコ会の霊性をこの講話においても端的に表現していることが強調された。

以上、他にも幾つもの内容に富んだ研究発表に接し、純粋に知性的な精神の鍛錬がキリスト教信仰におけるアイデンティティーを開示することを身をもって経験し得たことに感謝と喜びをもってこの報告を締め括りたい。